

無窮の志願

——「坂東本」修復・復刻事業を通して——

三 木 彰 田

一

宗祖七百五十回御遠忌記念事業として、真宗大谷派では「坂東本」の修復及び復刻事業を企画し、その取り組みが進められてきている。周知のように、修復作業は二〇〇三年七月に開始された。この修復は、「坂東本」の諸所に生じた損傷箇所について補修を加え、さらに今後損傷が生じることを防ぐための処置を施すことを目的とするものであり、二〇〇四年三月末にその作業を完了したが、この修復の過程で、現時点での「坂東本」について詳細に記録するために撮影が行われ、これをもとにして「坂東本」の復刻事業が着手された。「坂東本」の復刻事業については、去る二〇〇五年七月に真宗大谷派から『顕浄土真実教行証文類（坂東本）影印本』が刊行され、さらには「坂東本」原本の副本としての役割をはたすべく、二〇〇六年三月末の完成を目指して「完全複製本」の作成が現在進められている。

『坂東本・顕浄土真実教行証文類』とはいかなる書物であるのか、また「坂東本」修復・復刻事業に着手した経緯とその願いについては、『顕浄土真実教行証文類（坂東本）影印本』の解説として真宗大谷派宗宝宗史蹟保存会により

まとめられた『顕浄土真実教行証文類（坂東本）影印本解説』に記されているところであり、ここに繰り返すことはしない。ただ、「坂東本」修復及び復刻にある願いについて一言するならば、何よりも親鸞自筆の『顕浄土真実教行証文類』たる「坂東本」の確かな伝持・伝達を通して、親鸞の生涯を一貫する「顕浄土真実教行証」、すなわち浄土真宗の顕彰と公開という営みを、我々が自らに確かめつつ後代に伝達していくという一点にあると言えよう。

一連の「坂東本」修復・復刻事業に参加し、「坂東本」を身近に実見するという、まことに得難い機会を与えられたなかで触れてきた、その一つ一つの場面から、非常に大きくかつ重い問いかけを突きつけられているというのが、私の現今の正直な実感である。その問いかけを通して、改めて今、私自身に問題となっているのは、真宗学とは何か、また真宗学という学問に身を置くとはどういうことなのか、ということである。

言うまでもなくこの問題は、真宗学に身を置く者にとつて、その歩みの基点に確認されるべききわめて原初の問題であり、同時に、真宗学に関わるあらゆる場面においても、いつでも問いかけられ続けている問題であろう。本稿では、改めてそのような質の問いを今さらながらに突きつけられている自らの事実に即しつつ、「坂東本」の修復と復刻に関わってきた経緯を踏まえながら、真宗学に関わる問題の確認を自らに行ってみたい。なお、「坂東本」修復・復刻事業に関わつてその経緯や事実状況、私が実感した事柄については、これまでにもいくつかの短い文章に記したほか、口頭による報告の機会も幾度かいただいております、それらと内容が重複するところもあろうかと思う。また、『親鸞教学』という学会誌に、「坂東本」に関わつての主観的な感慨にもとづく事柄を十分に展開できないまま書き連ねることの当否が危惧されるところではあるが、この点についてはあらかじめご了承賜りたい。

二

先述のように、二〇〇五年七月に真宗大谷派から刊行された『顕浄土真実教行証文類（坂東本）影印本』は、これ

まで多方面からの要望があつたにもかかわらず実現をみなかつたカラー印刷によって刊行された初めての原寸大影印本である。

「坂東本」の原寸大影印本は、このカラー影印本の刊行に先立って、これまで二度にわたって行われている。その第一回目は一九三二年（大正十二）九月のことであり、立教開宗七百年を記念してのことであつた（「大正版影印本」）。それに続く第二回目は、一九五六年（昭和三十）のことであり、この時は宗祖七百回御遠忌を記念しての刊行であり、刊行作業の全面を赤松俊秀が監修してのものであつた（「昭和版影印本」）。

一九三二年の「大正版影印本」は、「坂東本」の全容が初めて内外に公開されたという大きな意味を持つものであつたが、この時、「坂東本」の公開が強く要望された背景には、明治から大正にかけての、いわゆる「親鸞抹殺論」をめぐって、それに反論する立場からなされた親鸞の筆跡研究の進展ということがあることも考えなければならぬ。

その後、一九五六年の「昭和版影印本」の刊行は、一九五二年（昭和二十七）の「坂東本」の国宝指定、さらにはそれを承けて一九五四年（昭和二十九）三月から赤松俊秀を中心に禿氏祐祥も参加して行われた「坂東本」の全面解装修理を契機としてのものである。「坂東本」の状況については、すでに佐々木月樵や山田文昭らによって、その形態や料紙の特徴が指摘されていたが、一九五四年の修理の際、新たに、当初の冊子の形態や料紙の綴じ方に特異な点があること、「化身土文類末」に引用される『大集経』の部分について、当初は卷子本であつたことなど、その具体的な状況が確認され、公にされたのである。^②「昭和版影印本」は、これを承けて「坂東本」が冊子として有する形態の特徴までも再現する形で作成されたものであり、その点で、親鸞が手許に「坂東本」を置いていた当時の形態を知ることができるといふ大きな意義を持つものであつたと言える。

これら「大正版影印本」「昭和版影印本」の刊行は、「坂東本」という一部の著作がもつ形態についての研究、すなわち文献書誌研究という側面で、大きな意味を持つものであり、これらによって親鸞の筆跡研究と「坂東本」の成立

過程に対する考察は大きく進展した。一方でその分野の研究の進展にもなっており、さらなる課題に直面したとも言える。それは、これらの影印本のいずれもが、モノクロ撮影による影印本であったということである。

「坂東本」に多くの朱書部分が存在することについては、先に述べた佐々木月樵、山田文昭らによって周知のこととなっていた^③。「昭和版影印本」の刊行にあたって、赤松俊秀は「坂東本」の撮影にあたって朱書部分と墨書部分の差異が印刷に現れるよう注意を払ってはいるものの、モノクロによる撮影・印刷という技術上の制約により、朱書部分の判読は困難なままであった。

「坂東本」朱書部分にかかわる問題については、一九七三年（昭和四十八）『親鸞聖人真蹟集成』第一・二巻に所収された「坂東本」の縮刷影印においてであった。この中で大谷大学に所蔵される丹山順芸（一七八五―一八四七）による「坂東本」の臨写本（真宗大学寮旧蔵本）に基づいて、二色刷の方法で「坂東本」の朱書部分が復元されたのである。「坂東本」における朱書部分の復元を可能ならしめたという点で、改めて丹山順芸の行った「坂東本」臨写という営為が持つ重要な意義と、『親鸞聖人真蹟集成』所収本が「坂東本」研究にはたした画期的な意味があることは言うまでもない。それゆえにこそ、そこから新たな課題が「坂東本」研究のうえに浮かび上がることとなったということも同時に指摘しなければならないであろう。繰り返すならば、『親鸞聖人真蹟集成』所収本はあくまでも「朱書の復元」であった。もちろんこの点については、『親鸞聖人真蹟集成』解説に多屋頼俊が、

現在では、原色版で原本の通りに複製することは、極めて困難、というよりも不可能なのである。第一に、厳密に原色版で撮影するためには、国宝の原本の綴目を解かなければならないが、それは許されないことである。第二に、朱は年代を経ると、色が褪せるものであるが、原本は、大正の関東大震災に遇ったことにもよるのか、朱の色が褪せて、極めて淡くなっている部分があり、全く見えなくなっている部分もあるのである。

と記すように、「坂東本」が置かれた状況と技術上の制約のなかでとられた最善の方途であつたことは言うまでもない。いわば二つのテキストを合わせることによって「朱書の復元」という画期的なことが実現されたことを通して、「坂東本」の朱書部分に対して、さまざまな角度からの注目が集まることになったわけだが、かえつてそこに「坂東本」原本の朱書部分、あるいはその全容が現在いかなる状況にあるのかという新たな関心が引き起こされていったということも、大切な事実として我々は看過してはならないであらう。

三

このような経緯を踏まえるとき、「坂東本」全冊の綴じをいったん解いて行われた今回の修復作業は、一九二二年の「大正版影印本」刊行以来、「坂東本」研究の歩みの中で残されてきた大きな課題にこたへうる絶好の機会であつたと言えるのであり、なおかつ高精細のカラー撮影をも実現し得たという点でも、非常に大きな意味を持つものであつたと言わなければならない。二〇〇五年七月に刊行されたカラー印刷による『顕浄土真実教行証文類（坂東本）影印本』は、この機会がなければ実現し得なかつたものであることは繰り返すまでもないが、改めてこの影印本を眼前にするとき、「坂東本」がいかなる書物であるのかという点について、今一度「坂東本」を私たちが把握していく上での視点の確認が求められているように思われる。

影印本を通して「坂東本」の朱書部分を見るならば、その朱書の書き込まれ方にも多様なものがあることは一目瞭然である。今それについて大きく言うならば、朱筆単独によって書き込まれた箇所、墨書部分を朱で書き改める箇所、墨書による書き改めをさらに朱でなざる箇所等、その形式の面でいくつかのパターンがあることが指摘できる。

さらには、従来の「坂東本」研究で課題とされてきた朱書部分だけにとどまらず、墨書部分についても、「坂東本」の諸所に濃淡の異なる墨が用いられて本文が記されていることも見て取れる。また、これまで刊行されてきた諸影印

本によって注目されてはいたものの判然としなかった、当初の本文とそれに対する抹消、あるいはその部分の書き改めの状況についてもその経過を判読できるようになった。たとえばそれは『行文類』の「正信念仏偈」の諸所に確認できることであり、ことに「坂東本」本文でもこれまでしばしば問題として取り上げられてきた「獲信見敬大慶人」の一句について見るならば、現行の「獲信見敬大慶人」に至るまでに親鸞が為した書き改めの過程をも判読できるのである。

これら朱書・墨書の状況は、修復作業の間に行われた「坂東本」の全体調査の際、常に注意を払いながら確認を加えていたことであり、高精度のカラー撮影及び印刷を用いることで、その状況の子細が公開されるということは十分想定されていたことであつた。しかし、それらの点にとどまらず、今回用いられた技術は、それに関わった者の想像を越えるかたちで、「坂東本」の状況について我々に示してくれたのである。それについて一例を挙げれば、「坂東本」各冊に用いられている料紙の状況の詳細、さらには紙の繊維の状況も含めて紙そのものの質感までも見て取れるものとなつたということである。「坂東本」に用いられている紙は、おおよそ楮紙、宿紙、「雁皮紙」であるが、影印本を子細に見るならば、同系の紙にもいくつかの種類があることがわかるだけでなく、料紙を漉いた際の簀の目の痕跡についても、多くの丁に確認できるのだが、この点については、作業の当初には全く思いもよらぬことであつた。

カラーによる今回の影印本を見るとき、改めて思うのは、従来のモノクロ印刷による影印本で見ると、「坂東本」の料紙とそこに記された文字から受ける印象と、料紙そのものもつ色まで含めて、そこに記された文字を見た時に受ける印象の異なりである。カラーとモノクロという違いはあれ、もちろんそこに記された文字に異なりがあるわけではない。しかし、「坂東本」原本にそなわる色まで含める形でそこに記される文字の一つ一つを見ると、その印象が従来と全く異なるという思いを禁じ得ないのである。

今回影印本を刊行するに当たって、それに関わった者全ての者が共有した基本方針の一つは、何よりも「坂東本」

原本の状況を手を加えない形で可能な限りそのままに影印本に再現するという点にあった。その基本方針に基づいて、影印本の作製にあたっては、「坂東本」原本と影印本の色調の入念な確認が繰り返し行われたのであり、その結果、影印本を通して、「坂東本」原本を直接目にするのと同様のことが可能となったと言っても決して過言ではないのである。

一言加えるならば、今回の影印本は、一九五四年に行われた「坂東本」の全面解装修理を経て後の状態、さらには今回の修復を経た時点、すなわち現在の、「坂東本」原本の各冊各丁の状況をそのままの形で再現したものである。^⑥「昭和版影印本」は先述したように「坂東本」が当初持っていた形態を復元したという点にその最大の特徴を持つものである。一九五四年の全面解装修理の中で確認された「坂東本」に存在する状況は、赤松俊秀の「教行信証」の成立と改訂について」に詳しく報告されている。しかし、それを通しては判然としない箇所もいくつかあったのも事実である。今回の修復・復刻事業の過程で、「坂東本」原本の一々の状況を確認したところ、既に一九五四年の全面解装修理後に報告されている状況以外に新たに判明した「坂東本」原本の状況もいくつかあること、また「昭和版影印本」と現在の、「坂東本」原本の状況との間には、いくつかの点で相違する箇所が存在することも明らかになったのである。それらの「昭和版影印本」と「坂東本」原本との間に生じたいくつかの相違点については、「昭和版影印本」の製作方針が一つの要因となっているものとも考えるが、それらの事実が判明したことによって、今回の影印本は可能な限り「坂東本」に忠実にとり基本方針が徹底されることになったのである。

今回の影印本作製の基本方針に込められているものは、言うならば、「坂東本」についてできるだけ多くの人がその事実状況を共有し、事実を共有したところから「坂東本」について多様な視点、また多様な立場からの研究・検討を加えていくことを通して、「坂東本」そのものを明らかにし、親鸞を明らかにしていきたいという願いであると言えよう。この願いはさらに影印本刊行後、現在も引き続き取り組まれている、「坂東本」の副本としての意義を持つ

「完全複製本」の作製方針に、より具体化する形で展開されているのである。

赤松俊秀は、「昭和版影印本」解説において、「大正版影印本」の刊行について、

この出版は「本書」「真蹟本」(筆者注・「坂東本」)を研究する上には、真に劃期的なできごとであつたと云つてよい。それまでは、「真蹟本」の形状を知ることには、限られた若干の学者の特権と云つてもよかつたのに対して、この出版を転機として、「真蹟本」を研究しようとするすべての学者に対して、云わば解放されたのである。

(「教行信証の成立と改訂について」・「昭和版影印本解説」一頁)

と述べ、さらに、

従来は特別なもののみ与えられていた坂東本の文献学的研究の機会を広く一般に開放することになった。

(「親鸞聖人真蹟集成」赤松解説・第2巻、六八三頁)

と述べている。今回刊行された影印本は、「大正版影印本」の刊行以来、そこに一貫して流れる「坂東本」公開の課題に、真に応えうる決定版とも言えるものであるし、この影印本を通して、「坂東本」の状況についての堅実な精査と確認が初めて可能となるといつてよいのである。

しかし、ここにもう一点確認しておきたいことがある。それは、今回刊行された影印本が決定版とも言い得るものであると言うことは、決してこれまで刊行されてきた諸影印本の持つ位置を損なうものではないということである。「坂東本」公開の願いは、「坂東本」の歴史をそのまま一貫するものである。そのことが具体的な形をとった事実を象徴する事柄の一つが、丹山順芸による「坂東本」の臨写であり、さらには「大正版影印本」「昭和版影印本」を初めとする諸影印本の刊行の事実であると言える。この事実の内に私たちが見定めなければならないのは、時代や技術等さまざまな制約と限界のなかで「坂東本」公開に力を尽くしていった「人」の存在である。そのような視点を持つとき、私たちは従来の諸影印本を通してそれらの「人」と対話し議論することも可能となるのであり、むしろ今回の

影印本を通して、従来の諸影印本は、我々にとって欠かすことのできないテキストとして新たな意味を持って浮かび上がってくるのではないだろうか。

四

ここまで影印本の刊行ということを通して述べてきたが、改めてここで冒頭に述べた真宗学ということに関わって思うところを述べてみたい。

明治以降、現在に至るまでの親鸞研究、真宗研究において、何よりも大きな意味を持つ事柄として注目されるのが、一九二二年（大正十一年）の「大正版影印本」の刊行による「坂東本」の全容の公開という事実である。今、何よりも大きな意味を持つ、と言うのは、ここまで繰り返し述べてきたように、今回の「坂東本」の修復・復刻という事業も、「大正版影印本」の刊行にその端緒を見ることができるところからである。

この年、一九二二年十月、金子大榮によって「真宗学序説」の講演がなされている。このことは真宗学とは何かという問題に直接関わることであるが、「真宗学序説」という題が掲げられていくところにあつた状況について、金子大榮は次のように述べる。

一体、真宗という宗旨は念佛を称えてお浄土へ参る、ただそれだけである。それだけの宗旨に、果して学問などする必要があるのであるか。こういう疑問を文政に関係ある、或る人が起したそうである。それと同じ事柄が内輪のほうにも起ってきて、一体、真宗学というようなことが果して成立するであろうか。なるほど、今日までも学問をしておつたのである。けれども、今日までの学問の意義と、今度、単科大学として、真宗学というようなことにして、やり出すときの意味とは、かなり違うようであるが、真宗学というものは果して成立するであろうか、こういう問題が内部にも出たのである。かく内外二方面から、真宗学というものは果してあり得るであろう

か、という問題が出た

(『真宗学序説』一一頁)

この「真宗学」というものは果たしてあり得るであろうか」という「内外二方面」からの問いかけの内容は、さらに、第一、宗教というものは、ただひとつの信である。そうして、その信ということは、直接に感ずることである。佛の救いというものを、いわば直観するのである。直観するのであるから、その直観の世界には、何も学問というようなものは用事がないではないか。こういうことが、まづ第一に言われるのである。或いはまた、真宗というものの特長は、ただ念佛というきわめて簡単な行のうえにある。直接にわれわれがその行、南無阿弥陀佛を称えて、さうして、そこになにか体験する。それより外に、何もないのである。その外のいろいろな学問沙汰というようなものは、却つて真宗としては、邪魔になるのであつて、そういう意味に於いて、学問というものは無用である。

(『同』一八頁)

という言葉で確かめられている。そのうえで金子大榮は、真宗学について、

親鸞聖人その人も、真宗を学べる人であつて、真宗学ということは、親鸞聖人の学問をわれわれがうけつづく、すなわち、親鸞聖人がどういふふうには、真宗を学ばれたかということ、明らかにして行くこと (『同』三〇頁)

と述べ、さらに「親鸞聖人の学び方を学ぶのが真宗学である」と繰り返し確認した上で、それによつて「真宗学というものが、始めて公開せられる」と言い切っている。

改めてこの確認を見る時、そこに注意されるのは、「内外二方面」からの問難とも言うべき問いかけの具体的な状況のいかんではなく、「真宗とは何か」という事柄に向けられたその問いの質であり、それに対していくとところに真宗の「学」が必然するという金子大榮の確認である。その意味で、この「内外二方面」からの問難には、「よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり」と言い切りつつ、なお「愚禿釈親鸞」という名乗りを闡明にして「顕浄土真実教行証」という教学課題を自ら担つていく親鸞の、その内面に突きつけられた状況と同質の問題が

言い表されているように思われる。同時にこの「内外二方面」からの問難は、現在においても私たちにさまざまな表現と様相をもつて突きつけられていると言えるのではないか。

「真宗学序説」が後に出版される際に、金子大榮はその序に、

私は敢てこれを定説とせんとするものではなく、普ねく志を同うする人々と共に、新たなる態度を以て真宗を学ばんとする機縁となれかしという念願より、小著として発表することとした。

(同「三頁」)

と述べている。ここに「志」という言葉で表現されていることは、法然、そして親鸞以来、一貫して浄土真宗に身を置く者に「内外二方面」から突きつけられている問難を踏まえるところに見出されたものであり、真宗学の徒である限り、「普ねく」自らのうちに課題的な事柄として見出すべきものであると言えるであろう。そのようなことを思う時、ことさらながらに私は今回の「坂東本」影印本の刊行を、「新たな態度を以て真宗を学ばんとする機縁」として自らに確認し、そこから「親鸞の学び方を学ぶ」という道に自らの歩みの基点をもう一度見定めることが何よりも必要とされると思うのである。

先にも引いたように、赤松俊秀は「大正版影印本」の刊行が、「真蹟本」を研究しようとするすべての学者に対して、云わば解放された、「坂東本の文献学的研究の機会を広く一般に開放することになった」と述べる。しかしこの「解放」あるいは「開放」は、やはり文献書誌的研究の側面に限定されていたと言わざるを得ない状況があるのも事実であろう。「昭和版影印本」の解説として赤松俊秀が発表した「教行信証の成立と改訂について」には、「坂東本の文献書誌の状況に立脚するところから、親鸞の思想の領域に及ぶ問題の提起がなされている。しかしその提起が真宗学において、十分に受け止められてきたのか。このような問いを立てるとき、そこに率直な反省を持たざるを得ない状況がある。もちろん、一々の事柄について取り上げられた論考がないわけではない。しかし、総体として真宗学において「坂東本」そのものが提起してくる問題に向き合ってきたのか、ということが思われるのである。

「坂東本」が親鸞の著作においていかなる位置にあるものかという点について見解は二様ではない。それらの見解のほとんどは、主に文献書誌研究に負うところが大きい。その見解の二々についてはここでは立ち入らないが、「坂東本」に「親鸞の学び方を学ぶ」という課題を通して考えるならば、抽象的な表現になるが、「坂東本」は『教行信証』諸本の一つとしてあると言うのではなく、「坂東本」をこそ『顕浄土真実教行証文類』として見出す、というところに真宗学の立場があるのではないだろうか。

親鸞の思想を了解することについて、親鸞像をあらかじめ把持した上で、親鸞の著作を了解していくということがなされる。その意味で、「坂東本」の上に「親鸞の学び方を学ぶ」という時にも、いかなる親鸞像を見出すかということが問題となってくるであろう。親鸞像の確立という点で、現在にまで大きな意味を持つのが、一九二二年（大正一〇年）十月の『恵信尼消息』の発見である。『恵信尼消息』は、現在に至るまでの親鸞研究の基軸に据えられている親鸞像を示すものとして大きな意味を持つものである。この『消息』を通して、

やまをいで、六かくだうに百日こもらせ給て、ごせをいのらせ給けるに、九十五日のあか月、しやうとくたいしのもんをむすびて、じげんにあづからせ給て候ければ、やがてそのあか月いでさせ給て、ごせのたすからんずるえんにあいまらせんとたづねまいらせて、ほうねん上人にあいまいらせて、又六かくだうに百日こもらせ給て候けるやうに、又百か日、ふるにもてるにもいかなるだいな事にもまいりてありしに、たゞごせの事はよき人にもあしきにも、おなじやうにしやうじいづべきみちをば、ただ一すちにおほせられ候しを、うけ給はりさだめて候しかば、しやうにんのわたらせ給はんところには、人はいかにも申せ、たとひあくだうにわたらせ給べしと申とも、せ、しやうじやうにもまよひければこそありけめとまで思まいらするみなればと、やう／＼に人の申候し時もおほせ候しなり。

〔定本親鸞聖人全集〕第三卷書簡篇一八七頁

という、法然と親鸞との値遇の具体性が明らかになったのであり、そこには「百か日、ふるにもてるにもいかなるだ

い事にもまいりてありしに」という事実の他、「げに／＼しく三ぶきやうをせんぶよみて、すざうりやくのためにとてよみはじめてありしを（中略）みやうがうのほかにはなにごとのふそくにて、かならずきやうをよまんとするや、と思かへしてよまざりし」^⑩こと、さらに「人のしうしんじりきのしんは、よく／＼しりよあるべしとおもひなし」^⑪たという、それまでは全く知り得なかつた親鸞の姿が記されている。

この『恵信尼消息』に表されている親鸞の姿は、それまでの親鸞像の基軸となっていた『御伝鈔』に表されている親鸞の姿とは全くの対極にあるといつてよいものである。これによって親鸞の行実についての史的側面からの研究が大きく進展したのであり、そこに打ち出された親鸞像が根底に据えられるところに、現在の親鸞の思想研究の実際がある。そこで今一度注目してみたいのが、『真宗学序説』の次の言葉である。

親鸞聖人という人は、御伝記がだんだんわかつて来て、ようやく『教行信証』の味わいがわかるのであるか、或いは、そういう伝記は一切わからぬでも『教行信証』というものを読んでいって、そこに、親鸞聖人という方の面目が現われているのではあるまいか、ということをお自分はいつも問題としていたのである。（中略）『教行信証』そのものを見ていけば、親鸞聖人という人間がある。そこに、ハッキリと親鸞聖人という人間が、その文字のうえに生きている。

（『真宗学序説』三五頁）

ここに示されている事柄のうちに、「坂東本」を親鸞の著『顕浄土真実教行証文類』として見出し、「坂東本」に親鸞の学び方を学ぶ」ことの一つの方向性が暗示されていると言えないだろうか。「坂東本」それ自体に親鸞像を見出し、それを通して「親鸞の学び方を学ぶ」、もちろんそれは史的研究に立脚する親鸞像を捨離することを言おうとするものではない。「坂東本」に親鸞像そのものを見出すということは、あくまでも、真宗学とは何か、という問いから必然することである。「坂東本」それ自体に見出した親鸞像を基点としつつ、さらにそれを様々な角度からの親鸞像と照応していくというところに、「親鸞の学び方を学ぶ」という真宗学の「新たな態度」を確立していく。その

ことが私たちに求められているように思うのである。

最後に付言すれば、「坂東本」の修復・復刻の作業に関わる中で、そこに実感させられたのは、何よりも親鸞その人の存在である。さらにそこに同時に思われたのは、「坂東本」の伝持・伝達に関わったであろう無数の同行・同朋の存在である。「坂東本」が著されて以来、性情をはじめとする門弟たち、さらには報恩寺、そして現在へ至る伝持の歴史には、浄土真宗を顕彰し公開しようとする親鸞の志願への呼応の事実が一貫している。その意味で、『顕浄土真実教行証文類』とは、親鸞によって著された著作ではあるが、決して親鸞の個人的な思想の書なのではなく、御同朋・御同行という関わりにおいて成り立った公の書であると言わなければならない。それゆえ、「坂東本」に親鸞を見出すということは、そこにまた同朋・同行という存在を見出していくことを私たちに要請してくるのではなからうか。

「御同朋・御同行」とはいかなる存在か。この問いからもう一つ想起されるのは、一九二三年三月、全国水平社創立である。このことに親鸞の存在が深く関わることは、周知の通りであるが、「人間を尊敬する事によつて自ら解放せん^⑫」という言葉に端的に表現されるこの運動の根底には、「親鸞の弟子なる宗教家？」によつて誤られたる運命の凝視、あるひは諦観は、吾々親鸞の同行によつて正されねばならない^⑬」^⑭と言ひ、「この御開山が私共の御同行です、私共はこの御開山の御同朋です」と言ひ切る事実がある。そこにあるのは、形骸化しそのいのちを見失っていく「浄土真宗」に対して、「親鸞の弟子なる宗教家？」という一句のもとにその事実を厳しく問い、批判し、同時に一方に自らは親鸞の「御同行・御同朋」としてあり続けようとする精神である。そのありように親鸞と同朋・同行との間においてなされた「顕浄土真実教行証」、すなわち浄土真宗の顕彰と公開という営みの一端を窺うことができるように思われるし、それこそが「坂東本」を伝持してきたものとして、私たちが見出すべき事柄なのではないだろうか。そしてその精神は真宗学の根幹に確認されるべきものとしてもあるのだろう。

ここまで四つの事柄を挙げながら、「坂東本」を通して真宗字について考えてきた。もちろんそれら四つの事柄の間に、歴史的な意味で何ごとかの関連があるのではないし、むしろ直接的、具体的な関連をそこに見ることは困難であろう。にもかかわらず、私がこの四つの事柄に注目したのは、そこに何らかの必然を見出すことによって何らかの示唆を見出し、真宗字とは何かという問題を確かめてみたいという思いを持つからである。本稿の冒頭にも述べたように、主観的な感慨にもとづいて不十分な展開の論に終始した。御批判を乞うものである。

註

- ① 佐々木月樵「親鸞聖人伝」(一九一〇年刊)、山田文昭「教行信証の御草本に就て」(『無尽燈』一九一四年四月)
- ② 赤松俊秀「教行信証の成立と改訂について」(『親鸞聖人真蹟国宝顕浄土真実教行証文類影印本解説』(昭和版影印本解説)二頁)
- ③ 「大正版影印本」刊行後の一九二六年(大正十五)に、真宗大谷派侍董寮によって「坂東本」の翻刻が行われ「真実教行証文類」と題して刊行されているが、その凡例には「音訓の振仮名及送仮名は平仮名と片仮名を混用せり。是れ研究者の爲に、御真筆に疑ひ無きものは片仮名とし、墨色筆勢の疑はしく考査の余地ありと認むるものは平仮名とせり」と記される。「真実教行証文類」には、「坂東本」の朱書による振り仮名・送り仮名のほとんどが「平仮名」によって翻刻されているが、「考査の余地あり」としながらも、朱書部分への着目がなされているという点に注意が払われる。
- ④ 「解装裏打の終了した「真蹟本」の本紙の写真撮影は、昭和二十九年八月十八日から始まった。撮影は「雲岡石窟」や「慶陵」の出版を担当した真陽社が引受けた。社長の中村友吉氏は以前の影印本の印刷に関係したので、よく注意を払い、富士写真工業株式会社に特別注文した乾板を用い、墨色の違いや朱註なども明らかに印刷に現れるように、準備をした。」(赤松「教行信証の成立と改訂について」・「昭和版影印本解説」三頁)
- ⑤ 「親鸞聖人真蹟集成」第二巻赤松俊秀解説、及び多屋頼俊「坂東本の朱筆」参照。
- ⑥ 今回の影印本には、「坂東本」原本そのままの形態に再現できなかった箇所もあるが、これらの箇所については、『顕浄土真

実教行証文類（坂東本）影印本解説』にその箇所が記されている。

⑦⑧ 『真宗学序説』三〇・三二頁

⑨ 『歎異抄』第二条（『定本親鸞聖人全集』第四卷言行篇一・五頁）

⑩⑪ 『定本親鸞聖人全集』第三卷書簡篇一九五・一九六頁

⑫ 『全国水平社創立宣言』（『部落問題学習資料』一二頁・真宗大谷派刊）

⑬ 『よき日のために 水平社創立趣意書』（『同』九頁）

⑭ 『部落内の門徒衆へ！』（『同』一八頁）